

# 六花



俳句雑誌 りつか

2014 (平成26年)

cover design Yuna Mizuno

2



親

大きな石

山田六甲

読み初めや雪崩れさうなるわが書齋  
抽斗を押さば寒波の来てゐたる  
末黒野の大きな石を起しけり  
白梅の一輪鮭に押ししてあり  
お手つきの勝姫さまや歌留多取  
小正月姫に漆のたばこ盆  
三毛猫の白毛白かり春障子  
靴捷げて寒の百間廊下かな  
風花の遠嶺を化粧櫓より  
いの門もはの門も松明けにけり  
菰巻の幹の丹田あたりかな  
心柱硝子越しなる梅ぐもり  
冬芝に風花の砂入れてをり  
奪ひあふ気配などなし寒の鯉

二十日正月呪術の色の鏡石  
西のお屋敷千両も万両も  
水漬をかまはず井戸を覗き込む  
春隣西の丸なる水を見て  
ふた抱へありさうな鯉春の雪  
巻き貝の二つ道あり冬の水  
竜の玉女人ぼとけのてのひらに  
春永の階段に手をつきにけり  
羽子板に武者窓の日の入りきたる  
濠の水めざす柳の冬芽かな  
白息の人と別れぬ大手門  
北濠に厠御殿や雪つばき  
風花やお菊の井戸に昼の闇  
白息でクルスの瓦仰ぎけり

臘梅のつぼみに鼻を近づけぬ  
日永かな銃眼の影三角に  
氷柱して桃果紋なる鬼瓦  
眠猫ばかり外堀守るの  
走根の乳吸ふごときかじけ猫

大川瀬住吉神社

牡丹雪天地逆さになりきたる  
南天の実を水音の走りけり  
狛犬の背なに粗目のかざり雪  
雪交や石の匂ひの風が吹き  
霏して高床下の能舞台  
暖房や玻璃戸の泪とめどなき  
笹鳴や縁の下なる竹箒  
びわの花湯冷のごとく咲きにけり

# しばらくを幹に沿ひたる落葉かな

藤生不二男

しばらくをみきにそいたるおちばかな ふしおふじお

舞ふ鳶のなほも高みへ紅葉山

照返し照返し散る紅葉かな

水べりをもつて尽きたる草紅葉

シャツターの切られし音や夕紅葉

しばらくを幹に沿ひたる落葉かな

この散り方を私たちは見ていながら詠めなかつた。不二男さんは、そこをなんなく詠んでしまった。いわゆる見ていて見えてなかつた物をつかみ出した発見が大きい。俳句には発見ということも大切な要素。枝から葉が地上に落ちるまでの「ほんの一秒にも充たないわずかな時間」をスローモーションの手法で描写している。葉が幹に当たって回転することなども読者は鑑賞に入れて味わうのだ。落葉は落ちている葉ではないか、と疑問の人があるかも知れぬが『改正月令博物笈』（馬琴編歳時記）の「落葉」の項に「諸木の葉、風に散り行くをいふ。また、木の葉の散りたるをもしへり」とあり、落ちる途中の葉も落葉としている。

雪 卿 集

気 合

市川伊團次

落葉踏む踏まねば音もなかりけり  
ごみ箱に妻のほかせし柿の種  
柚子湯より上がる身体の軽きかな  
ほのぼのとしたる林檎の赤さかな  
寒さより起く一瞬の気合かな

雀 口

梶浦玲良子

胡麻の村狐の嫁入り通りけり  
台風の近づいてゐる雀口  
満目の星のくすぐる長ふくべ  
秋しぐれ坂おりてくる子守唄  
五分前がくちぐせ流灯会

雪 卿 集

毒きのこ

佐津のぼる

測量の邪魔な芒の手折らるる  
なにげなく仰いでをれば銀杏散る  
宵と夜のはざまの空を狩渡る  
通りすがりの足蹴うけ毒きのこ  
掲揚の校旗に及び黍嵐

村 祭

志方章子

渡鳥黄色にけふる水平線  
秋蝶の白粉花にもぐりけり  
運動会敬老席に座らさる  
明月やけふといふ日の戻り来ず  
御輿かつぐ男振れる村祭

せつ じゅ しゅう  
雪 樹 集

明 石

筒井八重子

久々の皆にあい見て小春晴  
冬うらら虫の声聞き心晴  
山茶花の花びら散りてかざりけり  
冬の空いつも和める明石城  
ふた廻りやつと会えたる夕紅葉

もみぢ葉

出口 誠

もみぢ葉や幹より遠き部分から  
枝を去り流れに眠る紅葉かな  
細き木のたゞ一枚の照葉かな  
ぎこちなく水車回りに冬うらら  
山茶花や光る川面に顔向けて

# 蛭雪譚



六甲選

二十六年2月号選後に

鮭の市猛々しきが先づ買はれ

松本文一郎

「このシャケ怖ーいでも苦み走つたい男だわ、きつと元気で活きがいいに違いないわ！私これ買おーつと」鮭は、サケ目サケ科サケ属の日本人にも馴染みのある魚。この句は鮭特有の一見どう猛な顔つきに注目した。しかもその中で最も勇ましい顔付きをしたものから買われていく事よというのだ。新鮮なイメージを喚起するのだろうか。鮭は顔で、マグロは尻尾の輪切りで価値を判断して買い手がつく。この際何事も「見た目で判断」してはいけないという価値観は読者の鑑賞に委ねておこう。しかしやっぱり見た目も大事だよねえ。ん、これってオスの鮭の話？メスの話？一方的に私はオスと思ひ込んでいたんすよ。因みに「しゃけ」は江戸の方言。「そやししゃけに」というのは別の方言。

秋味や腕に自慢の氷頭膾

「ひすなます」の「氷頭とは鮭の鼻先の軟骨の部分のことで、氷のように透きとおっているためこのように



呼ばれる。主に普通のなますと同じく、正月の祝い膳に用いられる生の鮭の頭部を薄切りにし、塩をして酢で洗いさらに酢につけてしばらく置いた後、荒めに切って洗っておいた大根と合わせて、酢・砂糖・塩を合わせた調味料で和える。好みにより千切りにした柚子の皮をのせたり、イクラをのせてもよい。見た目透き通った軟骨のこりこりとした触感がこの料理の身上身「(『百科事典』)。このように料理をするために百科事典を買うわけもないが、おそらく実践で腕を磨いた料理であろう。この膾を食べさすために遠方の知人だつて招待したくなるというものだ。もし私にお呼びが掛かったら押っ取り刀で出向く。(押っ取り刀とは、緊急の場合に刀を脇に差す余裕もなく、手に持ったままの状態を「おっとり刀」という)。

# 六花集

柿 腕 い で 空 に 空 色 戻 し けり  
柿 こ ろ ぶ 一 度 大 き く 跳 ね て か  
縄 に 帯 残 し て 柿 の 落 ち に けり  
石 庭 の 波 間 に 浮 き ぬ 散 紅 葉  
受 話 器 置 き 再 び り ん ご 剥 き に けり

住田千代子

御 饌 の 田 の 藁 塚 正 座 して を り  
手 に と り て 桜 紅 葉 を 日 に か ざ す  
絶 筆 の 暗 号 め き て 長 き 夜  
糸 尻 の 傷 も つ 机 熟 柿 の 夜  
潮 の 香 の 血 液 セ ン タ ー 冬 に 入 る

平居 濤子

秋 う ら ら 雀 水 浴 び な ど を し て  
父 訪 は ば 銀 木 犀 の 盛 り か な  
お ん ぶ ぱ っ た 両 手 に 私 は 男 の 子  
瘦 せ こ ぼ ろ ぎ 身 動 き も せ ず 鳴 き も せ ず  
十 月 桜 見 た さ に 乗 り し 北 条 線

廣畑 育子